

# 淀川水系イタセンパラ保全市民ネットワーク活動報告

## ー外来魚駆除による在来魚の種多様性回復ー

鶴田哲也・木野 史裕・増田 篤紀・前畠 剛・吉田拓哉(大阪産業大学人間環境学部)

上原一 彦・内藤 馨(大阪府立環境農林水産総合研究所水生生物センター)

高田昌彦 (琵琶湖を戻す会)

綾 史郎(大阪工業大学工学部)

国の天然記念物イタセンパラを淀川で野生復帰させることを目標に、2011年8月に淀川流域で活動する市民団体と研究機関、企業、行政などが連携して「淀川水系イタセンパラ保全市民ネットワーク（略称：イタセンネット）」が設立された。2012年度からイタセンネットの本格的な活動が始まり、かつてイタセンパラの主要な生息地であった城北ワンドにおける保全活動、外来魚駆除釣り大会の開催、水辺の外来種対策リーダー養成講座、勉強会や成果発表会の開催、普及啓発活動等を行ってきた。定例活動としては、4月から11月にかけて月に2回、城北ワンド群の一部のワンドで地曳網による外来魚駆除を実施しており、その際に捕獲された魚類については群集構造を把握するために種毎に個体数を記録し体長を測定している。本発表では、イタセンネットの定例活動により得られた2012から2015年までの結果を基に、城北ワンドにおける外来魚駆除と在来魚類群集の多様性回復について議論する。

地曳網による調査の結果、外来魚駆除の行われているワンドでは魚類群集中の外来魚の比率および個体数が著しく減少し、在来魚が増加していることが確認された。また、在来魚の出現種数と多様度指数の年間平均値については、年を追うごとに増加する傾向が認められた。このように外来魚駆除の効果が認められたことから、2013年10月には生息域外保全されていたイタセンパラ成魚が城北ワンドの一部に放流された。放流されたイタセンパラは現在までのところ順調に再生産を繰り返しており、3世代目まで確認されている。

集中的な駆除が実施されているワンドでは外来魚の生息数は年間平均では減少しているものの、2013年9月、2014年8月、2015年7月には台風による大增水が発生し、その直後の調査ではオオクチバスやブルーギルといった外来魚の個体数が特に増加していた。このような台風などの攪乱の影響もあるため、外来魚の脅威が完全になくなったとは言えない状況にある。したがって、城北ワンドにおけるイタセンパラの野生復帰を成功に導くためには、今後も継続して外来魚駆除活動を実施していくとともに、より効果的な駆除計画を検討する必要があると考えられる。